

木^{むくげ}槿の花

男性自身シリーズ

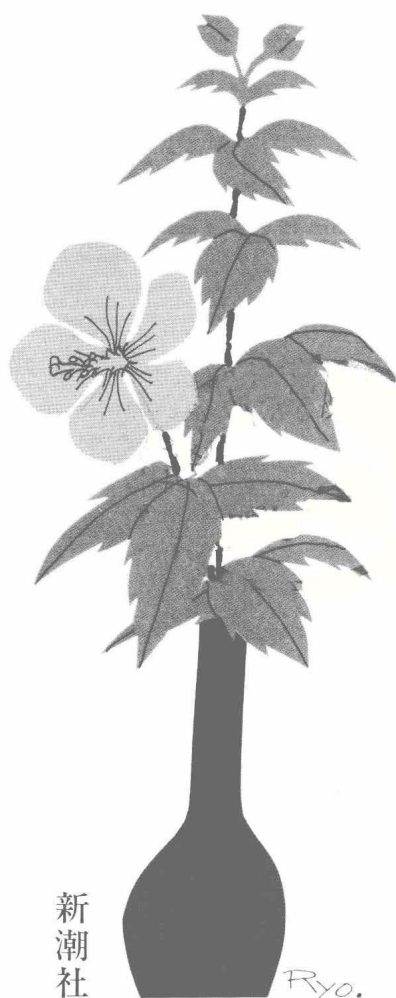
山口 瞳



木 げくむ 槿の花

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社

木槿の花

(むくげのはな)

■男性自身シリーズ17

■定価八八〇円

昭和五十七年四月十五日印刷

昭和五十七年四月二十日発行



© Hiromi Yamaguchi, Printed in Japan, 1982.

著者——山口瞳 (やまぐちひとみ)

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 郵便番号 * 一六三

電話 * 業務部 東京 (〇三) 二六六—五二二

編集部 東京 (〇三) 二六六—五四二

振替 * 東京四—〇八八

印刷所——大日本印刷株式会社 製本所——植木製本株式会社

* 乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

*
目次
*
*
*



いやがらせ	花束	世相	大関貴ノ花	職人氣質	新年	年頭の辞	年の暮	東京の町	暮近し	内儀の義侠	馬券哲学	秋の一日
71	65	60	55	50	45	40	34	29	24	19	14	9



鍵その他	家の経済	苔に降る雨	雑木林の春	思慮深い人	先公が悪い	逝く春	鳥去 ツテ	原田先生句碑除幕式	不可解	梅に降る雪	横浜	風邪の一日
138	133	128	122	117	112	107	102	97	92	87	82	77



甲子園見物	騒音	この嘘ホント?	夏の朝	額の汗	食べる人	夏風邪	齒無し	僻み根性	口説く	梅雨に入る	ギャンブル
203	197	191	185	179	174	168	163	158	153	148	143

やわらかでよろしい

一粒で三度

ガツカリ

戦友

木槿の花(一)

木槿の花(二)

木槿の花(三)

木槿の花(四)

木槿の花(五)

木槿の花(六)

木槿の花(七)

木槿の花(八)

208

210

212

219

238

243

249

254

260

266

272

278

カ装
ツ
ト幀

柳
原
良
平

木槿の花
むくげのはな

男性自身シリーズ
17

秋の一日



十月の初めから、水害でめっちゃめっちゃになってしまった半地下の食堂の改装に取りかかることになった。あれは大損害であつたなど、いまにして思うのである。

そこで、ヤケクソになって、食堂の奥にある以前の息子の部屋であつてその後は物置がわりに使っていたところとの境いを取り払ってワンルームにすることにした。床は栗の木の板にする。鉄骨を松の丸太でくるむ。奈良の大仏の囲いも、木造と見えてモトは鉄骨であるというから、これでいい。壁は漆喰である。これはすべてドストエフスキイの意匠によるものである。

工事が遅れたのは、こんどは谷保村^{やほ}の大工であるヒデちゃんに施工を頼んだからである。材木の好きな大工というのはおかしいが、ヒデちゃんは銘木を集めるという趣味があり、床板の栗はドストエフスキイと一緒に会津まで行つて探してきたものである。いま、その床板を張り終り、鉄骨が松で隠れたという段階であるが、見たところ、ちよつとミットモ

ナイくらいに立派になりそうである。ヨーロッパの農家の台所という感じになってきた。ヒデちゃんは、独り言を言いながら仕事をする。「あ、いけねえ、困ったなあ。こりゃまずいか。まあ仕方がねえ。……これでいいか。ええと、これでよし、と」などとぶつぶつ言っている。規格品を持ってきてベタベタとはりつける、いまの建築士とは違うのである。

私は、戦前に家に入りにしていた大工を思いだした。その大工の名は畑中と言い、南北戦争に出てくる融通のきかない軍曹といった感じの大男で、モッタイナイというのが口癖であり、庭に木戸を造ってくれと言っても、なかなかやってくれない。母と喧嘩するようになって、やっと出来あがった庭木戸は、伝統工芸の展覧会に出品できそうなシロモノだった。

いまの私の家は前衛的な建築家の設計によるもので、私は、いっさい口出しできなかった。また、専門家にまかせようという気持ちも強かった。

ところが、ヒデちゃんは、もつと何でも注文を出してくれと言う。私のほうには大工の機嫌を損つてはいけないという遠慮のようなものがあった。棟梁むらやまのほうからすると、こうすれば良くなるが施工主の負担が大きくなるという遠慮があるようだ。そう言えば、造作の好きだった父や母が現場で注文を出して、すっかりやり直しというようなことがあったのを思いだす。畑中はぶつぶつと独り言を言っていて、そばへ寄ってゆくと、額に青筋を立てて、モッタイナイ、こんなことしちゃモッタイナイと言っているのがわかった。

私は、本来はそうあるべき大工と施工主との関係を、すっかり忘れていたことになる。近頃の上棟式や落成式に味がないのは、こんなところからきていると気づいた。大工と建

築士とは違うのである。

*

まるで冷夏の埋めあわせをしてくれているように秋晴れの好日が続いている。風は乾いていて軽く、空気は透明である。滅多にはないことであるけれど、腹が減って、朝食が普通に食べられたりするのが嬉しい。一年中がこんなふうであれば人格が変わるだろうと思われる。

自転車に乗ってドストエフスキイのところへ行った。家のことでの相談と報告があったからである。ケネデイも来ていた。

ドストエフスキイは、あと二時間ぐらいで、私の愛読者である某氏が来ることになっているので色紙を書いてくれと言って墨をすりだした。私は字を書くのが好きだし、特にドストエフスキイの使う墨も硯も筆も色紙も上等だから、むしろ、これは楽しい作業になる。しかし、問題は、何を書くか、である。商売柄で、何か即興で気の利いたことを書きたいと思う。そこで苦しむ。苦吟という言葉は、このためにあるのか。

「今日は機嫌がよさそうだから……」

と、ドストエフスキイの妻の風船が言った。こういう際に眉間に皺が寄るようだ。それが自分でもわかつているのだが、機嫌が悪いわけではない。

ケネデイは、目下、家を建てなければならぬので、土地を探している。それで、ケネデイの家が出来て、そこへ一升ぶらさげて遊びにゆく情景を思い描いた。

訪ね行く家見えて来し花すすき

書いているときに、ウヘツという声が出てしまった。久保田万太郎に見せたら「これが直さずにいられましょうか」と言われるだろう。「訪ね行く」というのが、いかにも甘い。

「ずいぶん大きな家になってしまいました」

ケネディの顔を見て言った。

「あるいは野中の一軒家ね」

反応の早いケネディは、すぐにわかったようで、これ、私がいただきますと言ってくれた。

その直後に、ドストエフスキイがおそろしいことを言った。

「あの地下室の奥の小窓ね、ステンドグラスにしたらどうだろうか」

「それはいい考えだ」

「もちろん、下絵はあなたが描くんですよ。職人に造らせるんです」

本当に困った人だ。妙案であるから困るのである。私にしても、出来あいのものよりは自分で下絵を描きたい。

それで、ステンドグラスを造る若い職人のいる作業場へ行った。私が自分で描くと言ったら、職人は驚いていた。曲線が多いと値が高くなること、凸という形の出っぱっている部分はガラス細工では不可能であることなどを教えてもらったあと、八百屋へ行った。

どういうわけか、ドストエフスキイに言われたとき、私は洋梨と葡萄を描くという考えに抱えられていた。ステンドグラスに葡萄というのは、いかにも陳腐であるが、洋梨というのは黄色でもって明るくしようという考えである。八百屋で洋梨と葡萄と柿とキューイを買ってきて、パステルでもって、すぐに描きだした。

「あら、これ、洋梨じゃなくてパイヤよ」

と、女房が言った。果物を盛った皿をふくめて、すべて曲線であるが、値段のことはどうでもいい。ヤケソ気分が続いていた。

その絵を持って、ステンドグラス屋へ行った。

「葡萄というのは、よくある図柄ですね」

はたして若い職人はそう言った。それはいいのだけれど、描いた絵が、どうにも幼稚に思われる。いそいで家に戻ったのだけれど、氣持が落ちつかない。上手下手はともかくとして、もっと洗いものでありたい。

こんどは枝のついた柿を描きたいという考えにとりつかれてしまつて、堪え性のない男であるから、ただちにトクさんに電話をして二本ばかりの枝を持つてきてもらった。それを描いているときに、近所の子供が顔を出した。

「お絵描き、お絵描き」

と叫びながら、しきりに心ばかりが急ぐのである。

それを持つて、また、自転車に乗つてステンドグラス屋へ行った。

「いそがしい、いそがしい。まったくドストエフスキイというのは困った人だ」

若い職人は、もう、パイヤと葡萄の絵をステンドグラス用に訂正を加えている最中だった。

「柿はいいですけど、枝は無理ですよ。ふとくなりますよ」

彼はあきれ顔で言った。無理でも何でもいい。とにかく、こいつから解放されないと仕事にならない。私は破裂しそうな頭をかかえるようにして、自転車で帰ってきた。

馬券哲学



灰色のソフトをかぶり、白い手袋をした男が、ゆっくりゆっくりと地下の馬道から歩いてくる。続いて白い大きな誘導馬が姿をあらわす。戦いに臨むサラブレッドが続く。馬たちは、馬道から芝に入るときに、驚いたような、躊躇するような、こわがるような、あるいは芝であることを確認するような動作を示す。これが不良のダート・コースであると、幼児が風呂に入るときのような動きになる。

ソフトをかぶり白い手袋をした男はスターターである。スターターは、発走を指示するだけでなく、レース全体を司ることになっている。スターターになって何年か経つと人格が変ってしまうと言われている。この、スターターの姿が見えてきて、馬が芝コースに足を踏み入れるあたりが好きだと言ったら笑われてしまった。たいていの人は不思議な顔をする。初々しい感じがいい。従って私は三歳馬のレースを好む。

*